

## V. J. ベ ニ ッ ト

ヘルマン・ヘッセの作品における女性の役割

内 尾 一 美

渡 辺 信 生 訳

### デーミアン

ラウシャーの時期を通じてヘッセは、現実の世界から逃避しようと何度も試みたが、それは内面的な葛藤からの必要な救済を彼に与えはしなかった。熱烈な献身と、『ペーター・カーメンツィント』、『車輪の下』、『ロスハルデ』、『ゲルトルート』に描かれているような想像の領域から、より実質的で信頼のおける療法への移行でさえも、必要な内面的な解決を提供してはくれなかった。ヘッセは遂に彼自身、空想の世界も現実の世界も、彼に答えを与えてはくれないという認識に到達し、新たな方向をたどりはじめた。彼の不健康な現実逃避的な内向性が、彼をあのような泥沼状態におとし入れたのだということを確信していたので、ヘッセは彼が「誇り高き孤独」<sup>49)</sup>と名づけていたものから自己を解放するために、外部からの助けを探し求めることを余儀なくされた。

『デーミアン』の創作の動機は、数多くそして多様である。「外的には、それに関係があるのは、ある生き方の全面的な崩壊、すなわち、家庭と家族の喪失であった。内的には、精神の崩壊寸前の状態から生れた自己発見の新しい段階であった。」<sup>50)</sup> 外的には、ヘッセの結婚生活の段階的な崩壊が、1912年のマリアーの精神衰弱の最初の徴候の現われとともに、ほとんどその頂点に達していた。彼らの三男マルティンは、ちょうど『ロスハルデ』のピエール・フェラグートと同じように重い病気にかかっていた。第一次大戦の勃発によりヘッセの混乱は大いに増大した。しばらくの間彼は言わば政治評論家になって、このような戦争の無意味さと無益を非難した。しかしこの間中ずっと、ごく狭い範囲の友人たちが彼を支持してくれるだけで、彼は自ら求めて一人ぼっちであるように思われた。それは大いなる変動と不安定の時期であった。ヘッセの重要

な評論『カラムーゾフの兄弟』は、『デーミアン』の創作よりも数年後の日付けになっているけれども、この評論の体験と思想は、この小説を生み出したものである。<sup>51)</sup>

ヘッセは、「古代から伝わっている、アジア的、神秘的理想が、ヨーロッパのものとなり始める、ヨーロッパの精神をむさぼり始める。私がヨーロッパの終末と呼ぶのはこのことである。……一切を理解し一切を認める態度を支持して、すべての確固たる倫理的、道徳的原理から離れることである。」<sup>52)</sup>と書いている。ロシア人は、この形の未だ定まらない魂の素材を体現しているのである。<sup>53)</sup>

ヘッセは西洋文明の形式を拒絶して、世界のヴェール、個性化の原理を突き破ろうとたえまなく努力している。アジアは母の領域を代表するものとされ、父権的な傾向のヨーロッパを実際に呑みこもうとしている。頽廢した文明は本能と衝動の抑圧を効果的に続けることができない。そして衝動と本能が表面に浮び上がってくる時、善と悪のような客観的な規準は、もはや根拠の確かなものではなくなる。イワン・カラムーゾフを通じて、ヘッセは新しい掟、無意識によって規定された法の銘板が、善と悪の彼方に打ちたてられねばならないということを暗示しているのである。それは神と悪魔を一つに結合したアブラクサスの世界である。ヘッセにとって彼自身の無意識の発見は、「古い世界、古いまがいのもの平和、全体性と首尾一貫した実在の、合理的で、独立している、意識的な自我のあの浅薄な、時代錯誤的な幻想」の破壊とほぼ等しいものであった。<sup>54)</sup>

ユング心理学とのヘッセの親密で個人的な接触は、第一次大戦が終った年、彼がラング博士によって治療を受けた年になってやっと始まったけれども、多分彼はすでに、フロイト、ユング、プロイラー、シュテーケルの著作を広範に読んでいたであろう。<sup>55)</sup>『ヘルマン・ラウシャー』のような著者の初期の作品においてすでに、太母の原型へ向けられた起源と再生に対するヘッセの探究のパターンが見いだされる。『真夜中すぎの一時間』においては、責任ある「明るい」世界、父の世界と、禁じられたものの「暗い」神秘的な世界、母の世界との間の葛藤が見いだされる。しかしこの二つの世界のなんらかの意味のある決着は見られない。『デーミアン』の完成においてはじめて、ヘッセの内的な葛藤にとっての決定的な解決が行われたことを認めることができるのである。

『デーミアン』は、個性化のさまざまな段階に密接に対応して書かれているので、精神分析的プロセスのすばらしい実例になっている。個々の章は、自己

認識への道程に沿ったさまざまな段階をあらわしている。「明るい世界と暗い世界」という概念（影）、卵からの鳥の出現、ベアトリーチェ（アニメ）、「エーヴァ夫人」（超自然的な人格）、そしてデーミアン（新しい人格の中心）でさえも、個性化のプロセスにおける一つの原型から次の原型への進行を表わしている。シンクレアはある程度、原型的な人物あるいはシンボルの一つ一つに合体し、その一つ一つを彼自身の内的自我のありうべき相として知覚する。こうしてシンクレアは、さまざまに投影された無意識を同化し、よりよく評価することができる。各々の原型を意識的に統合することで徐々に、自己認識への道程に沿って、あるシンボルが消滅し次のシンボルが出現する。

「影」………シンクレアの「暗い世界」との最初の出会である「影」、言い換えれば個人的無意識の影の相は、悪魔的なクローマー、つまりシンクレア自身の悪魔によって描写される。シンクレアがリングについて嘘をつくという出来事からはじまって、クローマーのこの少年に対する支配は次第に完全なものになる。シンクレアがなし得る唯一の和解は、次第にクローマーの要求に屈服し、それによって両親の「明るい世界」から、彼を苦しめるクローマーの悪魔的な世界へ徐々に移ることであるように思われる。

人間は、自分の交際している人のあら探しをするのはすばやいが、自分自身の行動の同じ欠陥に気づくことはできないということは周知の事実である。同じことが無意識の内容についてもあてはまる。無意識の内容がシンボルあるいは投影としてあらわれるときにのみ、そして人がまたそれらの意味を推測する際に、好都合にも専門家の忠告が得られるときに、人はそれらを自分自身の心の構造の欠くことのできない部分として認識し受け入れることができる。クローマーはシンクレアの悪の原型であり、彼の投影された影、すなわち暗い側面なのである。

人が影に伴う派生物をも含めて、影の領域に直面することは極めて重要なことである。人は、罪なるものは実に自分自身の生得の一部であって、他人の人格の否定的な側面ばかりではないということを認識しなければならない。初めのうち、シンクレアの罪悪感とうしろめたさは、彼自身とクローマーとの殆んどグロテスクな関係から生じて、殆んど耐え難いほど大きくなる。ただ単に自分自身の内部の悪を認識し、理解するだけでは、罪悪感を除去するのに十分な土台にはならない。シンクレアが責任を認め、二つの世界の関連と対等性に同意するときのみ、彼は救済を得るのである。<sup>56)</sup>

この望ましい目標に到達するためには、両親の「明るい世界」と、クローマ

一の「暗い世界」との間に、もっと大きなバランスが実現されねばならない。シンクレアは、次第に自分の父親に対するある意味での優越感を感じはじめる。

私は父に優越感を抱いたのだ。父の無知に私は一瞬ある種の軽蔑を覚えた。ぬれた編上靴に対する父の叱責は、取るに足りないことに思われた。……それは父の神聖に加えられた最初の裂け目であった。私の子供時代の生活を支えていた柱につけられた最初の切りこみであった。自分自身になるのに先立って、この柱を誰でも破壊したに違いない。<sup>57)</sup>

新たに獲得された洞察を身につけたシンクレアは、今や自分の影に直面する心構えが前よりもよくできている。彼はその影が外部から投影されようと、夢の中で内部から現われようと、それとは無関係に、各々の像をそれが現われるにつれて体験しようと決心している。<sup>58)</sup>

同化と統合の過程の中で、シンクレアの影の投影であるクローマーは消え失せる。クローマーの追放は、クローマーがシンクレアの父を殺すように要求して、シンクレアの胸の上にまたがる夢の中で描かれている。

これらの夢の中で一番怖かったのは、私の父をおそって殺そうとする夢だった。私は半狂乱になって目をさました。クローマーがナイフを研いで私に手渡したのだ。私たちは並木道の木の影に立って、誰かを待ち構えていた。誰を待ち構えているのかわからなかった。しかし誰かがやってきて、クローマーが私の腕を突いて、お前が刺し殺さねばならないのはあの男だと言ったとき、それは私の父だった。そこで私は目をさました。<sup>59)</sup>

このあとに続く数頁で、マックス・デーミアンが彼をクローマーの恐しい支配から解放する。だがそのときデーミアン自身がシンクレアを支配下におく。しかしながらこの行動は、恐怖と嫌悪感というよりは、むしろ感謝と喜びの感情をひきだすのである。

ここに含まれている意味は、必ずしも理解困難なものではない。すなわち「暗い世界」は、「明るい世界」を犠牲にした上での承認を迫っているのだ。クローマーは無意識のすでに統合された相として排除される。他方デーミアンは、全面的な統合の地点にはまだ到達していない無意識の他の側面を代表して、従ってこれからの処理と研究が必要なのである。

「アニメ」……「影」の段階から「アニメ」の段階への移行は、『デーミアン』においては次のようにして達成される。今度二人が会うときに、姉を連れてくるようにシンクレアに要求することによって、クローマーは彼により大きく性を意識させようとしている。シンクレアは、自分はそのような卑しむべき

行動を促す道具であるかも知れないと考えてぞっとする。

彼が行ってしまうと、不意に彼の欲望の意味が幾らかかすかに分ってきた。私はまだ完全に子供だった。だが少年と少女は、少し年がいくと、何か秘密のいやらしい禁じられたことを一緒になっているとすることを、私は噂話で知っていた。そして今私は……それがどんなに途方もないことかということを、突然はっきりと分ったのだ。<sup>60)</sup>

再びシンクレアはあの防護壁の一部が、自分の回りに崩れ落ちるのを見る。彼は必死になって助けと理解を求めて両親にかけよりたいと思う。しかし自分を完全にさらけ出すような問題に関しては、自分が全責任を負わねばならないことをシンクレアは知っている。シンクレアはただ一人でこれらの悪魔的な力と戦わねばならない。そして大抵の育ちのよい少年がそうであるように、彼はかなり拙劣な戦いをする。

自分自身で工夫するように放置されて、シンクレアは、クローマーに対して不気味で神秘的な力を行使し続けるデーミアンを探しだす。ほとんど魔法のように、クローマーはシンクレアに対する支配をやめ、時には以前の犠牲者を避けたりする。デーミアンを見いだすやいなや、シンクレアは性に関する否定主義は実際には根拠のないものであることを理解させられる。彼はシンクレアに対して、正と邪、善と悪のような昔から伝わってきた概念は、実際は相対的な概念であり、絶対的なものとして解釈されるべきではないと説明する。彼は何が許されるものであり、何がそうではないかを、自分自身で確かめることが、あらゆる人の義務であると説明しつづける。個人は誰でも自分自身の内部に、彼自身の個人的な掟を持っているように思われる。性の話題は、キリスト教徒の間で議論されるときには、ある種の汚れを伴っているかも知れない。だが、「ギリシャ人や他の多くの民族は、その反対にこの衝動を神聖なものとし、それを大きな祝祭をして崇拝した。『禁止』は従って永遠なものではなく変ることがあるのだ」<sup>61)</sup> という事実を考え給え。

デーミアンの説明によって深められたこの認識は、無意識による意識への前進に抵抗し、コントロールする力を更にシンクレアに与えるという効果を持つ。この適応によって彼は、真の自我を見いだすという目標に近づく一步を踏みだしたのである。彼は今やアニマの諸像に直面する用意ができています。

ある日、非常に愛らしい魅力的な若い女性が、公園を散歩しているのを見るやいなや、シンクレアは直ちに彼女に魅惑される。この舞台装置はわざとらしい。なぜなら自然が無意識のシンボルになっており、両者は極めて密接に女性、

即ち始源、誕生などに関係を持っているからである。この隔離された状況の中で、彼の無意識の諸像が、再び投影の形をとって表面に昇ってくる。ベアトリーチェ（公園の若い女性）は、シンクレアに対して巨大な魅力を発揮する女性のカテゴリーに入るの、彼は直ちに彼女を女神のレベルにまで高め、彼女を崇拜しはじめる。

丁度クローマー（影）が、シンクレアのあらゆる行動に対して完全な支配を達成しようとしたのと同じように、ベアトリーチェ（アニマ）は、今やほとんどすべての目覚めた思考時間を占領して、彼を圧倒しようとする。彼が今直面している問題は、新たに獲得された女神の支配から、なんとかして自己を絶縁することである。シンクレアにとってこのプロセスの第一歩は、積極的に自らの空想に没頭してそれに参加することである。無意識の内容が吸収され、それによって拡大された人格、つまり意識的な知覚が獲得されると、それは無意識の投影を除去し、その暗示的な力を減少させるという効果を持つ。<sup>62)</sup>

従ってシンクレアは、その日公園で会った若い女性の絵を描きはじめる。彼は常に記憶と夢をもとにして描きながら、そのプロセスを限りなくくり返す。ついに一枚の絵が彼に話しかけてくると思われるほど、以前の絵のどれよりも彼の心に訴える。

ある朝そんな夢からさめると、突然その絵が分った。その絵は深い知り合いのように私を見つめ、私の名前を呼んでいるように見えた。それは母のように私を知っていて、以前から私の方を向いているように思われた。胸をどきどきさせながら、私はその紙を見つめた。とび色の濃い髪、半ば女のような口もと、異常に明るい強い額（紙は自然に乾いていた）を見つめた。すると私の心の中で、認識と再発見と知識とが次第に近づいてくるのを感じた。<sup>63)</sup>

この絵は誰を表わしているのか、シンクレアは熟考しつづける。彼はなおもこの絵と話し、この絵の夢を見さえる。ついに彼はこの絵が本当は誰を描いているのかを悟る。「何と遅くやとそれに気づいたことだろう。それはデーミアンの顔だった。」<sup>64)</sup>

晩春のある夕方、太陽がある角度でシンクレアの部屋に射しこんでいるとき、日射しがそれを照らすように、ベアトリーチェの絵を出窓の中にかけてみようという考えが彼の心の中に浮ぶ。

長い間私は、日射しがもう消えてしまってから、その絵と向かい合っていた。すると次第にこの絵は、ベアトリーチェでもデーミアンでもなく……私自身だという気がしてきた。その絵は私に似てはいなかった……実際似ている筈

はないと思われた。だがその絵は、私の生命を形づくっているものであった。それは私の内面、私の運命、或いは私の霊であった。いつかまた私が友達を見つけるとしたら、その人はこんな様子をしているだろう。私の生も死もこのようなものだろう。これは私の運命の響でありリズムであった。<sup>65)</sup>

彼は、その絵が表わしているのは、ベアトリーチェでもデーミアンでもなく、彼自身つまりシンクレアなのだという結論に達する。

その後シンクレアは、自らベアトリーチェと名づけた若い女性と何度も会会う。だが今や彼女は、彼が彼女に最初に会ったときに感じた魅力を、もはや彼に及ぼすことはない。彼女は彼の心にある種の満足感、「君は僕に結びついている。だが君ではなく君の絵が結びついているだけだ。君は僕の運命の一部なのだ。」<sup>66)</sup>ということを知っているというある種の感情を喚起する。彼女の目的に役立ってしまうと、彼女は彼の思考から消え失せ、彼から完全に忘れられる。シンクレアのアニマの投影は、今や吸収され、個性化の道程に沿って、次の段階を履行し実現することが可能になる。

「鳥」……個人を自己認識への道程に沿って、更に先へ導くというこの機能をなしとげてから、アニマは後退して、鳥というシンボルを変える新しいエネルギーに道をゆずる。アニマから新しいシンボルへの移行は、次のようにして達成される。彼が描いた無数の絵に、デーミアンとベアトリーチェとの密接な類似を発見して、シンクレアのデーミアンに対する憧れが再びいきいきと彼に働きかけ始める。彼は絶えずデーミアンのことを考えている。そしてその間にシンクレアの思考は、シンクレアが彼に会った初めの頃の彼らの出会いへとさかのぼって行く。彼はその際、彼の父の家の門の上にかかっている紋章の鳥の姿に、デーミアンが夢中になっているのをとてもあざやかに思いだす。シンクレアがこの鳥の姿に明らかに無知で無関心であることに対するデーミアンの反応は、切実なものである。「この鳥の姿は僕には面白い。このような物には敬意を払わねばならない、と彼は言っていた。」<sup>67)</sup>

その夜シンクレアはデーミアンと紋章の夢を見る。紋章は父の家の門の上のかなめ石の上にある。その夢の中でデーミアンは、このシンボルを食べるようにシンクレアに要求する。「それを呑みこんでしまうと、呑みこまれた紋章の鳥が腹の中で生きていて、私の腹を充たし、内側から食べつくし始めるのを感じてびっくり仰天した。死の恐怖に充たされて私は飛び起き、目をさました。」<sup>68)</sup>

その同じ夜に、デーミアン／ベアトリーチェの絵が床に落ちてこわれる。シンクレアはこの絵を、敢て元の位置に戻そうとはせず、夢の中で見た鳥の姿を

描こうと努める。二・三日して彼は、この猛禽の思いだせる限り正確な似姿を完成した。彼はこの最も新しい心象を描く際にとってもあざやかな色を用いた。頭はぴかぴか光る黄金色である。「それは暗い地球儀の中に体を半分埋め、青空を背景にして抜けだそうともがいていた、巨大な卵から出ようとするかのように。その絵を長く眺めるにつれて、それは夢に現われた彩色の紋章のようにますます思われてきた。」<sup>69)</sup>

卵から抜け出ようとしているこの鳥の真の意味に関しては、学者たちの間に完全な意見の一致がある訳ではない。投影されたシンボルを自我の中に再び吸収することが、紋章に関する中心的な夢を全く適切に説明するものである、という考えが提唱されてきた。<sup>70)</sup> J・C・ミドルトンは、紋章を食べてしまうことは、プシケを豊かにする心霊のエネルギーを内に向けることを象徴し、そしてまた心の動物的な衝動のあり得べき昇華を表わしていると示唆している。<sup>71)</sup> エムマニエル・マイヤーは、青い背景は思考のためのシンボルであり、鳥は飛翔を表わしていて、思考の上方への飛翔を示しているという見解を持っている。<sup>72)</sup> その意味は、シンクレアがまだ肯定できず、そのため彼の内的な自我を消費している性的な欲望を超えるものではないということもまた主張されている。<sup>73)</sup>

しかしながら最も説得力があり、この研究の目的に最も役に立つ解釈は、セオドア・ジョルコースキーによって主張された解釈である。シンクレアがこのような内的な目標を達成するために、幼年時代の世界と伝統的な社会を破壊するということが最も重要なことである。従って鳥も同様に生れるためには、卵の調和と完成を破壊しなければならない。しかし鳥が卵から出現することの意味は、シンクレアの直面している問題のはるかに深い側面をも含んでいる。なぜならバッハオーフェンによれば、卵は世界の「明るい極と暗い極」を象徴するものであり、ローマ古代の時代にさかのぼる思想を象徴するのである。<sup>75)</sup> 「その平行関係は全く詳細なものである。シンクレアが打ち砕くのは単に『世界』ではなくて、明らかに偽りの両極性の世界なのである。」<sup>76)</sup>

我々はシンクレアが徐々に因襲と断絶して行く諸段階を跡づけてきた。影、アニマなどを受け入れ、認識し、内面化することによって、彼の因襲との隔離はより完全なものになる。ヘッセはすでに『デーミアン』の序文の中で、卵のモチーフを挿入するための準備を読者にさせている。シンクレアは書いている。

すべての人間の生活は、自分自身への道であり、一つの道の試みであり、一つの小径の暗示である。曾ってどんな人も完全に自分自身ではなかった。しか



し誰でも自分自身になろうと努めている、ある人は愛昧に、ある人はより明白に、人それぞれできる限り。誰でも自分の誕生の滓を、原始の世界の粘液と卵の殻を最後まで背負って行く。<sup>77)</sup>

この後の各段階は、シンクレアを少しづつ自己実現の目標に近づかせ、いわゆる偽りの両極性を持った、伝統的な世界の束縛から離脱する自由を、次第に多く彼に与えて行く。ピストーリウスとの広範な会話を思いだして、シンクレアは、彼が真に新しい何かユニークなものを得たことは認めないが、彼らの会話が、彼が卵を破るのに役立つ、また彼が骨の髄まで自分にくっついている粘膜から抜けだすのを助けて、彼が前進するのに手を借してくれたことは認めている。

私たちの会話が、完全に新しいもの、全く意外なものを、私にもたらすことはめったになかった。だがどんなに平凡な会話でも、会話はすべて私の胸中の同じ点を、絶えずかすかにハンマーで叩いた。会話はすべて私の形成に手を借し、私が皮を脱ぎ、卵の殻を割る助けになった。そしてそのつど私は、頭を少しづつ高く自由に上げて行行った。ついに私の黄色い鳥は、その猛禽の頭を、打ち砕かれた世界の殻から突きだした。<sup>78)</sup>

鳥のシンボルには、個人の精神的かつ宗教的再生の双方を表わすという、もう一つの側面が追加されるべきである。この次元は、ユング心理学の集会的無意識の次元である。シンクレアは、鳥がかなめ石の中で何の上にも止まっていたのか、忘れてしまったことを強調した。つまり彼は紋章を描いていたとき、それを記憶によってやったのではなくて、自由な創造的なプロセスを利用したのであった。しかしその際、シンクレアが卵を砕いて出てくる鳥を描き、そのことによって彼の絵を古い崇拜のシンボルと結びつけたというまさにその事実こそ、ユング心理学の集会的無意識のプロセスを例証するものであった。<sup>79)</sup>

周期的に訪れる一連の夢の間、シンクレアは、自分の無意識から出現するさまざまな像に悩まされる。しかしながら、鳥の像はその不在によって特に目立っている。この状況は、このシンボルが見事に内面化されており、そのためそれが以前と同じ要求を、もはやシンクレアの意識に対してすることはなく、という結論に我々を導いて行く。自分の理想を、外部の世界にも、人間にも、確立されてはいても忘却されている礼拝にも、或いは、仕立服のように体に合う神にも見出すことができずに、シンクレアは、探究を彼自身の内部に向け、ここが真の理想のありかだ、ということを知る。<sup>80)</sup>

「エーヴァ夫人」……エーヴァ夫人の像の分析と解釈は、ヘッセの全作品中

の人物やシンボルの中で、最も困難なものである。なるほどエーヴァという名前は、最初の母であるイヴを直ちに連想させる。そしてこの連想は、シンクレアのような彼女の精神的な子供たちは勿論、彼女の息子であるデーミアンの特色を表わすために利用されている、カインのモチーフによって高められている。<sup>81)</sup> エーヴァ夫人の場合は、しかしながら、何か他の特定の象徴の原型というよりは、むしろユング的なマグナ・マターの原型を表わしているのである。

ユングによれば、集合的無意識によって作りだされる最も古い原型の一つは、太母の原型である。シンクレアが今や夢中になり始めるのは、この新しいシンボルである。再び夢の枠組の中で、太母は最も熱烈に抱擁して、彼を完全に圧倒する。

きまった夢、つまりいつも繰り返される空想の戯れが、私には重要なものになった。私の人生で一番重要で、あとあとまで残ったこの夢は、およそ次のようなものであった。私は父の家に帰った — 門の上に紋章の鳥が、空色の地に黄色く輝いていた — 家では母が私を迎えてくれた — だが私が入って行って母を抱こうとすると、それは母ではなく、今まで見たことのない人物で、大きくて強そうで、マックス・デーミアンと私の描いた絵に似ていた、だが別の人だった。強そうなのに全く女性的であった。この人物が私を引き寄せて、深いぞっとするような愛の抱擁の中へ私を抱きしめた。歓喜と恐怖とが交じり合った。その抱擁は礼拝であると同時に犯罪であった。私を抱いていたこの人物の中には、私の母と、私の友デーミアンの思い出とが、余りに多くひそんでいた。その抱擁は、一切の畏敬の念に反してはいたが、やはり幸福の極みであった。私はこの夢から何度も、深い幸福感を味わいながら、また怖い罪からのように、死の恐怖と良心の呵責を感じながら目をさました。<sup>82)</sup>

今度はシンクレアは、ベアトリーチェの場合にそうしたように、夢の像の肖像を描こうと試みるだけでなく、積極的に彼女を探しだすことに没頭する。数日間ぶっ通して彼は、可能な限りどこであれ探し求める。すなわち、汽車の駅や町の中や汽車の中など — 覗ける開いた窓は全部覗きこむという手段にすら訴える。しかしすべては無駄である。そのとき、自分の運命を無理にこじあけることはできないという考えが心に浮ぶ。一切はしかるべきときに、それ自身の法則に従って起るものである。シンクレアが探索をやめると、不思議にもデーミアンが現われ、彼をエーヴァ夫人の所へ連れて行く。

エーヴァ夫人を見るやいなや、シンクレアは直ちに、ベアトリーチェ、デーミアン、クローマー、紋章、アブラクサスといった、自分がこれまで独力で考

えだし、そして拒絶してきた一切のイメージや典型的人物たちの縮図と達成とが、彼女に代表されているのを悟る。しかしながら、シンクレアとエーヴァ夫人との関係のアムビヴァレントな性質は、かなり明白である。「私がどうなるうとも、この女性をこの世で知り、その声を飲み、そのたたずまいを呼吸するのは無上の幸福であった。彼女が私にとって母になろうと、恋人になろうと、女神になろうと — 彼女がいさえすればよかった。私の道が彼女の道の近くにありさえすればよかった。」<sup>83)</sup>

シンクレアの言葉から、エーヴァ夫人は、彼の最終目標である魂を体現している、と彼が確信していることは明らかである。「私の本性が惹き寄せられて近づこうとしているのは、彼女という人間ではなくて、彼女は私の内面の象徴にすぎず、私をもっと深く私自身の内面へ導こうとしているのだ、ということを感じるように思うことがよくあった。」<sup>84)</sup>

「魂について」というエッセーの中で、1917年以降ヘッセは、彼の「魂」の概念をとにかくも明確にした。魂を表現することは、人生における人間の特殊な役割であると彼は感じている。世界のあの特殊な領域として魂を発展させることは、人間の義務なのである。「魂は何か人間的なものなのか、動物や植物にも内在してはいないのか、と論争するのは無益なことである。確かに魂は、いたる所にあり、いたる所に可能であり、いたる所にひそみ、いたる所に予感され望まれている。……人間とは魂を発展させることを目下の課題としている世界の片隅、特殊な領域であるように我々には思われる。」<sup>85)</sup> 従ってヘッセの魂の定義は、生命における表現の基本的な形式、潜在力であり、実際に人間の終局的な目標なのである。

エーヴァ夫人の像によって要約されているのであるが、シンクレアの理想は魂である。そしてこの小説の最後の数頁で、彼はこの目標の究極的な実現に向かって、ぐんぐん引きつけられて行く。「私は一つの目標、一つの道の高みに到達したのだ。そこから更にはるかな道が、約束の国々に向かって延び、きたるべき幸福の樹の梢の影に守られ、近くにあるあらゆる歓びの庭の冷気に包まれて、遠く気高く現われていた。」<sup>86)</sup> 会話を交す中にエーヴァ夫人は、自分自身の夢を見出すことが各人の義務であると言う。「そうです、自分の夢を見つけないといけません。そうすれば道は楽になります。けれどもいつまでも続く夢というものはありません。どんな夢にも新しい夢がとって代ります。どんな夢も引き留めようとしてはいけません。」<sup>87)</sup> エーヴァ夫人の忠告に対するシンクレアの答は、自分は自分の現在の夢に、永遠の、感謝にみちた忠誠を誓う用意

があるというものである。「私の夢がどのくらい続くことになるのか、私には分かりません、と私は言った。永久に続けばと願っています。鳥の絵の下で、私の運命が母親のように恋人のように、私を迎えてくれました。私はその運命のもので、それ以外の誰のものでもありません。」<sup>88)</sup>

この小説の内面的な性質のために、エーヴァ夫人とシンクレアがどんな関係なのか、明確に決定するのはますます困難になるのであるが、彼が常に彼女を、魂と母のイメージの両方を体現するもの、と見なしていることは全く明らかである。ユングによれば、すべての人間の再生のみならず個人の再生も、マグナ・マターによって成就されるという点で、母のイメージは特に重要である。ジオルコースキーは次のように述べている。

エーヴァ夫人との半近親相姦の関係には、シンクレアは決して現実のレベルでは入って行かない。しかし我々がこの議論の出発点とした、結末における大いなる幻想は、彼のユング心理学的な類推、すなわち、幻の道を通して再び生れるために、母親の中へ再び入って行こうとする、彼の試み以外の何であろうか。そして普遍的なスクリーンに投影されたとき、この幻想はもちろん新しい人類全体のマグナ・マターの体内からの誕生を意味する。ユングは、近親相姦のモチーフは、多くの神話伝説に、特に太陽神話に共通のものであると明確に述べているけれども、ヘッセが小説全体の構造に適合する原型のパターンを、すなわち、宗教的なパターンを選んでいるのが特色である。エーヴァ夫人が何らかの単純な像にぴったりしないのは全く明らかである……彼女はシオンの娘、マグナ・マター、ユング的なアニマの混合物であって、これらのさまざまな諸体系の要素が、彼女の性格の中に混ざり合っている。<sup>89)</sup>

エーヴァ夫人との結合を求めるシンクレアのアムビヴァレントな熱望は、ヘッセ／シンクレアのアムビヴァレントな愛（精神的な愛）と性（性的な愛）との葛藤を表わしている。ヘッセ／シンクレアは、性の衝動を無力なものにすることによって、性愛の衝動を昇華させた。普通、正常な人間には愛と性の統合があるのだが、この統合は、『デーミアン』においては達成されていない。ヘッセはこの統合を生涯のかなり後期に至るまで達成せず、達成したのも専門の治療の助けを借りてのことであった。<sup>90)</sup> ヘッセは母親から自己を解放することができなかった（エディプスの段階）、このことはもし子供が後に女性との正常な愛に入ることができるためには、絶対に不可欠のことである。このような葛藤から生ずる不幸な結果は、性的不能をひき起すほどの、異性に対する不安と恐怖として表現される。ヘッセが女性に対して成しとげた関係は、友情に基づいていて、性慾の

満足や成就に基づくものではなかった。ジグムント・フロイトによれば、感情の二つの流れ — 情愛の感情と官能的な感情 — は、個人において愛に対する完全に正常な態度を保証するために、統合しなければならない。<sup>91)</sup> ローレンツ・マウラーは、ヘッセの内面的な葛藤のために、「詩人は、『デーミアン』においては、まだ最後の一步を踏みだしていない」と言っている。<sup>92)</sup> 彼は続けて、このような前提は、ヘッセの確信と完全に一致しているという考えを提出する。「ヘッセは、生に敵対する意志の正当性からの解放を表現する道徳的な問題に、まだ専ら束縛されていて、それを克服した後で初めて、『古い母の国』への敷衍をまたぐことができるのであるから。」<sup>93)</sup>

この小説の最後の幻想は、フランダースのどこかの空を背景にして、エーヴェ夫人を巨大に見せている。彼女の中へ無数の男たちが、巨大な洞穴へ入って行くように消えて行く。彼女の額から無数の星が現われ、そして舞い上ったこれらの星の一つが、シンクレアの近くで破裂して、彼を大きな土饅頭の下に埋める。

担架で車から病院へ運ばれたとき、シンクレアはついに、自分は更にもう一つの目標に到達したのを感じる。「今私は広間の床に寝かされていた。私は呼ばれた所に来たのを感じた。」<sup>94)</sup> 彼はデーミアンと神秘的に結合していた。デーミアンは今や姿を消し、今後はシンクレアの内部に住み続けるであろう。

シンクレアは、もはや外部の投影や像に依存しない地点に到達していた。彼は自分の新しい人格を実現していた。エーヴェ夫人の原型は、そこからあらゆる観念と形象とが生じ、そしてそこへ向ってそれらがまた究極的には帰って行かねばならない自然の全体性と融合した。シンクレアは母なる自然によって埋められた（殻の破裂）、そして今や独立した人格として再生するのである。ヘッセ自身、人は死後再び宇宙に合体させられるものと信じていた。

もう一度私はこの人生のかなたに、何かがあるかどうかを知るのは、重要なことではないと言いたい。重要なことは、正しい仕事をやったということである。もしそれが正しければ、他のすべてのことは大いにうまく行くであろう。宇宙あるいは自然の私に対する関係は、神が他の人々に対する関係と同じである。自然は人間の敵であり、征服されるべき何かである、と考えるのは間違っている。むしろ我々は自然を母とみなし、安らかに自然に屈服すべきである。もし我々がこのような態度をとるならば、我々は、他のすべてのもの、すなわち、すべての動物や植物がそうしているように、宇宙に帰りつつあるのを率直に感じるであろう。我々は全体のほんの微少な一部にすぎない。反抗するのは

馬鹿げたことだ。我々は大きな流れに身をまかせねばならない。<sup>95)</sup>

上述の極めて楽天的な見解にも抱らず、シンクレア／ヘッセにとっては、周期的に起る問題がいくつかあるだろう。しかし彼が受けた治療のおかげで、彼は今や自分の無意識に起因する諸現象に、ずっとよく対処できるようになっており、将来は上首尾に自分自身の治療を行うことができるであろう。

## 注

- 49 Hesse: Gesammelte Dichtungen, Vol. 1. p. 14 (以下 Ges. D. と略す)  
50 Mark Boulby: Hermann Hesse, p. 81  
51 Ibid. p. 85  
52 Hesse: Ges. D., p. 162  
53 Ibid. p. 142  
54 Boulby, p. 85  
55 Hugo Ball: Hermann Hesse, p. 161  
56 Emanuell Maier: The Psychology of C. G. Jung in H. Hesse, Diss. p. 79  
57 Hesse: Demian, p. 115  
58 Jolande Jacobi: Complex, Archetype, Symbol, p. 110  
59 Hesse: Demian, p. 130  
60 Ibid. p. 132  
61 Ibid. p. 158  
62 Maier, p. 92  
63 Hesse: Demian, p. 177  
64 Ibid.  
65 Ibid. p. 178  
66 Ibid.  
67 Ibid. p. 182  
68 Ibid.  
69 Ibid. p. 183  
70 Boulby, p. 109  
71 J. C. Middleton: Hermann Hesse as Humanist, diss. p. 160  
72 Maier, p. 100  
73 R. B. Matzig: Hermann Hesse in Montagnola, p. 20  
74 Theodore Ziolkowski: The Nobel of Hermann Hesse, p. 114  
75 p. 67 ~ p. 68 参照  
76 Ziolkowski, p. 115  
77 Hesse, Demian, p. 102  
78 Ibid. p. 200  
79 Ziolkowski, p. 116  
80 Ibid. p. 132  
81 Ibid. p. 133  
82 Ibid. p. 188  
83 Ibid. p. 233  
84 Ibid. p. 242  
85 Hesse: Ges. D. Vol. VII, p. 69  
86 Hesse: Demian, p. 233  
87 Ibid. p. 234  
88 Ibid.  
89 Ziolkowski, p. 138  
90 Edmund Gnefkow: Hermann Hesse, p. 71  
91 Sigmund Freud: The Most Prevalent Form Of Degradation in Erotic Life, p. 153  
92 Lorenz Maurer: Hermann Hesse und der Zeitkreis der Mutterwelt der Rhythmus, p. 23

93 Ibid.

94 Hesse: Demian, p. 256

95 Miguel Serrano: C. G. Jung und Hermann Hesse, p. 22

この訳文の原著は、V・Bennet: The Role Of The Female In The Works Of Hermann Hesse, 1972 である。原文の英語を内尾一美君が訳し、独語を渡辺信生が訳した。畏友内尾一美君は昨年2月4日に急逝した。本人は最後まで病院からの生還を堅く信じていたようであった。昭和51年にこの本を訳しながら、訳文は勿論、ヘッセの女性像やユングの心理学、精神分析などについて、思いつくままに語り合ったことは、今は懐しい思い出になってしまった。この本の中で、最も面白いと思われるデーミアンの項をここに掲載して、同君の業績の一端を偲びたいと思う。なお訳文について、同僚の英語科教授即席水雄先生に、貴重な御意見や御指摘をいただいた。心からお礼を申しあげる次第である。